

デスデモーナの信仰愛とイアーゴの理性

堀内夕子

Desdemona's Agape Love and Iago's Cruel Rationalizing

Yoko HORIUCHI

Abstract

Othello is a play in which the proud main character falls into a scheme and is deceived. Essentially Othello will not be shaken easily but he is confused by Iago's evil plan. After struggling in confusion, he kills his wife.

This work can be viewed as a battle between good and evil or God and the devil. There is a conflict between Desdemona who believes in God and follows the doctrine of agape love and Iago who is like an incarnation of the devil.

This work is a tragedy of a person who lives between two extremely different structures, agape love and reasoning (Umeda 1985). Desdemona lives for agape love, on the other hand Iago lives for cruel rationalizing. Othello is the person who hangs between them and to cap it all his dear's death wakes his agape love again.

In this paper, I would like to deliberate the relative image of two characters in *Othello* and biblical quotation, focusing on devilish Iago who, it is not too much to say, he is the leading character and Desdemona who lives life to the full for agape love.

0. はじめに

『オセロー』は高貴な性格を持つ主人公が、悪人の陥穽にはまり、転落して行く物語である。生来、簡単に感情に動かされる事のないオセローが、嫉妬というイアーゴの悪魔のような奸計に惑わされ、惑乱の果て、妻であるデスデモーナを殺害してしまう。

この作品は、Bethell (1952) によれば、(1) 個人的、(2) 社会的、(3) 形而上的、の3つのレベルから解釈できるという。そして、(3) のレベルでは衝突と葛藤の対立が、善と悪、神と悪魔との戦いであると捉えることができる、と述べている。

それは神を信じ、アガペーの精神をもって聖書の教え通りの行動をする者、デスデモーナ

平成16年2月26日 原稿受理
大阪産業大学 教養部 非常勤講師

と、悪魔の化身であるかのようなイアーゴと対立であろう。オセローは信仰的愛を持つ妻デスデモーナと共に、キリスト教信者として善の道を歩もうとするのだが、イアーゴの理性に誘惑され、破滅の道を進んだ。しかし、デスデモーナは最後まで夫の愛を疑うことなく、誤解によって殺害されるという悲運にさえ遭遇しても、最後まで信仰を捨てなかった。

『オセロー』は、信仰的愛と理性との二極構造のなかにはさまれて生きる人間の悲劇である(梅田 1985)。信仰愛に生きるデスデモーナ、理性に生きるイアーゴそして、その間をさまよひ、愛しい者を失って再び信仰愛に目覚めるオセローその人である。

本小論では主役とも言ってもよいほどのイアーゴの悪魔性と、アガペーの精神そのものを生きるデスデモーナに焦点を当て、この『オセロー』の登場人物2人のイメージと聖書の言葉の関連を考察する。

1. イアーゴの悪魔性

1.1. イアーゴの悪事の動機

石川(1988)はイアーゴの悪事の動機は不明であり、イアーゴは言うなれば人間の悪の総括、悪魔の憎しみから、美しく善良な人間を破壊することだけにレエゾンデエトル¹⁾(raison d'être)をもつ男である、と述べている。確かにイアーゴが「人間の悪の総括」であることには間違いない。イアーゴがオセローを憎む理由は、イアーゴの台詞の中にいくつか述べられている。1つ目は、オセローがイアーゴでなく、キャシオーを副官に選んだこと(Ii.8-40)、2つ目は、我が妻がオセローによって寝取られたという猜疑心からの嫉妬(Iiii.385-98, Ii.293-306)、3つ目は、オセローが、自分も強く関心を持つ女、デスデモーナの夫であることからの嫉妬である(IIi.286-292)。しかし Auden(1957)が指摘しているように、これらの動機を受け入れるにはあまりに矛盾が多い。

あらすじの中で、イアーゴが副官の地位を奪い取るという様子はないし、妻のエミリアを寝取られていると分かっているなら、彼女に対し、オセローがデスデモーナにとったような厳しい態度で接するであろうが、それも全く見受けられない。そして、イアーゴはデスデモーナのことを狙ってはいるとはいうものの、自ら彼女を手に入れようともしていない。シェイクスピアは、はじめに嫉妬と復讐の念に燃えるイアーゴを提示しながら、途中で巧妙にきりかえ、人間の社会からはみ出した秩序の破壊者として、ただわけもなく憎しみだけが人格化されたイアーゴを登場させたのだ(石川 1988)。

イアーゴの存在理由は悪魔と同様であると筆者は考える。悪魔の悪事の目的は、人間を神から遠ざけることであり、その標的とされる人間に対して、悪魔は嫉妬や復讐の念を抱く必要はない。犠牲者は誰でもよいのである。たまたま不運にも、人間の弱さや、愚かさから

イアーゴアの陰謀にはまったのが、オセローだったのである。

1.2. 半分しか言わないイアーゴア

イアーゴアは紛れもなく非道な悪者であり、彼の役柄は聖書の中の悪魔そのものである。聖書の物語の中で、へびに姿を変えた悪魔はエデンの園で幸せに暮らしていたアダムとエバに災いをもたらせる。神は、アダムとエバの服従のしるしとして、善悪の知識の木をエデンの園に植えた。そして彼らにこう言った。「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」（「創世記」第2章16-17節）。しかし、へびはエバに神の言葉を疑わせるように仕向け、結局、彼女はその実を食べてしまい、結果、楽園を喪失してしまう。

へびは女に言った。「園にあるどの木からも取って食べるなど、ほんとうに神がそう言われたのですか」。女はへびに言った、「わたしたちは園の木の实を食べることは許されていますが、ただ園の中央にある木の实については、これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないからと、神は言われました」。

へびは女に言った、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神は知っておられるのです」。
（「創世記」第3章1-5節）

郡司（1977）は、このへびの言葉は、イアーゴアの「半分しか言わない」ずるさを連想させると述べている。イアーゴアに“From this time forth I never will speak word”（V.ii.301）と居直られては、一体何を言おうとしないのか、オセローも気になってしまう。イアーゴアがオセローを毘にはめていく手口には「全部をいわない」というところが目立つ。イアーゴアの“Why, then, I think Cassio's an honest man”（III.ii.132）につづくオセローの言葉は「止めろ、まだなにかあるな。よいから、思うままを、自分自身に語りかけるつもりで話してくれ、遠慮は要らぬ、この上もない忌まわしいことを、この上もなく忌まわしい言葉で語ってのけるがよい」であり、同じくイアーゴアの“My lord, you know I love you”（III.iii.119）につづくオセローの言葉の中に「お前の真心、忠実、軽々に言葉を弄ばぬ厚重な性格、それだけにお前の口ごもるような度々の言いさしがおれの心を騒がせるのだ、…」というくだりがある。

一方、へびは神が人に「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。

しかし…」と言われた事実を承知の上で、逆に知識の半分を利用して、「園にあるどの木からも取って食べるなど、ほんとうに神が言われたのですか」と尋ねることによってエバの心に反撥の種を植えつけているのである。

オセローもイアーゴーから「奥様とキャシオーの仲があやしいですぞ」と突然言われたのであれば、一笑に付したであろうし、エバも「どの木からも取って食べていいんですか」と尋ねられたら、神の命に背くまでには至らなかったであろう。

1.3. 悪魔の3つの誘惑

ストラウス（1978）は、エバは善悪を知る木の実を食べる時、彼女は3つの誘惑に直面したとし、次のように述べている。聖書の中では、その木の実を見たエバは、食べるに良く、見た目には美しく、賢くなるには好ましいと思ったのでその実を食べた（「創世記」第3章6節）。そして「食べるに良く」「目には美しく」「賢くなる」という3つの誘惑は「ヨハネの第一の手紙」第2章16節での肉の欲、目の欲、持ち物の誇りに相当する。従って、①肉の欲 = 「食べるに良く」、②目の欲 = 「目には美しく」、③暮らし向きの自慢 = 「賢くする」ということになる。すなわち人間の肉体感覚を満足させようとする欲望、持ち物を多く得ようとする欲望、そして人々に自分の重要性を印象づけようとする欲望である。「世と世にあるものとを、愛してはいけない。もし、世を愛するものがあれば、父の愛は彼のうちにいない。全ての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、持ち物の誇は、父からでたものでなく、世から出たものである」（「ヨハネの第一の手紙」第2章15-16節）。

聖書には、誘惑にあったときにはすぐに逃げ出せ（「コリントへの第一の手紙」第10章14節）、と勤め、人間の心が物を際限なく欲するとき、それが偶像礼拝になると告げている。（「コロサイ人への手紙」第3章5節）。しかし、エバは逃げ出さず、そこに立ち止まり、自分の持っていないものに心惹かれてしまうことを許し、「女はその実を取って食べ」てしまったのだ（「創世記」第3章6節）。

同様に、オセローの初めの罪も、自分の重要性を印象づけようとする欲望であったと考えられる。オセローは、自分の部下であるイアーゴーが、我が妻とキャシオーについて既知っている事を、自分はまだ知らないでいるという事を遺憾に思い、イアーゴーのはっきりしない態度を裏切りだと言う。「お前の態度はおのれの知己を裏切るものだぞ、イアーゴー、その男がみすみす不当な目に会わされているのを知りながら、それと知らず、つんぼにしておこうというのだからな」（III.iii.145-157）。

自分より身分の低いものが、自分の知っていないことを知ることは、オセローのプライドが許さない。この台詞の中で、イアーゴーのことを知己といっているが、それはただ、彼が

誠実だと信じ込んでいるからであり、その考えは簡単に覆るものでもある。実際には、たかが部下としか思っていないのだ。

邪悪な考えをオセローに吹き込もうとしているイアーゴー本人が、「早い話が、たとえ宮殿といえども、時に穢わしいものが入りこまずにはすみますまい？いかに高潔な心情の持主とはいえ、その胸のうちに卑しい邪念が忍びこみ、正義と共に坐して裁きの庭を左右する 때가ないと申せますまい？」(III.iii.139-144)と、自分の言う事を聞かないように忠告しているにもかかわらず、オセローは自分の欲望に勝てず、悪の道へと導かれて行くのである。

イアーゴーの悪の手はオセローだけには止まらない。キャシオーが酒の弱いことを利用し、わざと彼が夜警をしくじるように仕向ける。「まあ、みんな仲間ばかりなのだ——一杯だけ、あとはおれが助ける」(II.iii.34-35)。「あとは俺が助ける」というのはキャシオーを釣る為のおいしい餌であり、イアーゴーには彼を助ける気などない。それどころか、陥れようとしているのにそれが見抜けず、結局イアーゴーの言うとおりに酒を飲み、何がどうなっているかも不分明の混乱を起こし、キャシオー失脚の直接の原因、そしてオセロー、デスデモーナの関係にくさびを打ち込む原因を作ってしまった。ストラウス流に言えば、キャシオーは悪魔の持ってきた人間の肉体感覚を満足させようとする欲望に負け、その結果、自ら悲惨な事態を引き起こしたといえる。

1.4. イアーゴーのへび(悪魔)のイメージ

イアーゴーは、誠実で正直な人間は無知で、そのような人間は彼の理想からはかけ離れている。彼は、知恵があり、要領がよく、悪賢い人間でありたいと望んでいる。3幕3場でデスデモーナの所へ復職依頼に来たキャシオーが、後ろめたそうに去る光景を、わざとオセローに見せるように仕向けるイアーゴーの悪戯について、今西(2000)は、イアーゴーはここで「考える」²⁾(thinking, doubting, speculating)という近代的な思考と推論というものを巧みに利用し、オセローをアナモルフォーズの覗き穴³⁾に誘い、オセローはついに、デスデモーナを疑うという禁断の果実を食べてしまう。魔法のハンカチの利用法にも見られるように、イアーゴーは近代的な認識と証明という方法を使って、疑いはじめた人間をいっそう強い疑念にと追い込んで行くのだ、と述べている。

それは、エバに余計な知識を吹き込んだ「楽園のへび」のようである『オセロー』の中で、イアーゴーと楽園のへびを関連付ける表現がいくつも現れる。イアーゴー自身、自分が「楽園のへび」であることを誇らしげに主張している箇所さえ見受けられる。デスデモーナのハンカチが手に入り、それを利用してオセローを嫉妬に狂わせることができると確信したイアーゴーは「ムーアの奴、早くもおれの毒が効きはじめている」(III.iii.328)と微笑み、自分

の作り話に卒倒するオセローを見て「毒よ、廻れ、手際を御覧じろ、廻れ、廻れ！」(IV.i.44-45)と言い、なんと騙されやすい阿呆なんだと嘲笑する。

一方、オセローはイアーゴの囁いた嘘を信じ込み、嫉妬からの憎悪の毒で、自分の心が腫れあがってしまえばいいと自暴自棄とも取れるような発言をする。「このおれの胸を毒蛇に噛ませ、その憎しみの毒をもって腫れあがらせるがいい！」(III.iii.452-453)この台詞から、イアーゴという毒蛇に噛まれてしまったオセローのイメージが浮かび上がる。

オセローがエミリアに、デスデモーナとキャシオーの間に何か怪しい様子はないか、と聞いたとき、エミリアは全面的に決してそのようなことはない、と否定し、そのような疑いを持つオセローを腹立たしくさえ思い、誰かにそそのかされているのではないかと忠告する。「もしどこかの悪党にそそのかされてとおっしゃるなら、そんな男はあの楽園の蛇同様、神の呪いに滅びてしまうがいい！」(IV.ii.14-16)。もっとも、そそのかしている張本人はエミリアの亭主であり、我が亭主を「楽園の蛇」呼ばわりしなければならないことは、なんとも皮肉である。

キャシオーがデスデモーナのハンカチを持っているのを見て、オセローは我が妻の不義を確信し、狂乱状態に陥り、デスデモーナを殺害するためにイアーゴに毒を用意するように命じる⁴⁾。しかしイアーゴは毒殺するのではなく、絞殺するように勧める場面は、へびが獲物を絞め殺すように、オセローがデスデモーナの首を絞めるイメージを観客に思い描かせ、まさにイアーゴがへびを象徴するものであることを示している。「毒薬はお止めなさいまし、絞め殺すのです、奥様がみずからお穢しになった、その床の上で」(IV.i.204-205)。

2. デスデモーナ的愛

2.1. アガペー

13世紀において、アリストテレスの哲学を理論的な支えとして、壮大なキリスト教神学の体系を完成し、人間における理性という2つの相反する結びつきを確立しようとしたのはトマス・アクィナス(1225~?1274)である(Willey 1950, 稲垣 1979)。アリストテレスがパウロ及びアウグスティヌスと調和させられ、形而上学は啓示と、理性は信仰と調和させられた。この総合においては神学が最高位を占め、あらゆる物は神より発し、神はあらゆる物の存在の根元であるばかりか最高善でもあった。神は「原動力」としてあらゆる被造物を動かして神をもとめしめる。愛はこうしてあらゆる因果関係の最も深い根源であった。そして、その最も深い根源である愛を忠実に貫いたのが、デスデモーナである(梅田 1985)。

デスデモーナが信仰のまなごしをもってオセローを愛していることは、彼女の言う言葉に宗教的な内包性があることから自然と分かる。デスデモーナは夫に彼女の愛も運命も「捧げ

る」(consecrate) (I.iii.254) のであり、夫への義務は単に“duty”でなく「巡礼の旅」(pilgrimage) (I.iii.153) であり、その話を聞こうと願うのは「祈り」(prayer) (I.iii.152) でもある。彼女はオセローをエロスでなくアガペーの精神をもって愛し、聖書の教えそのものを生きた。

エロスが美や真実などのいわば価値のあるものを志向する愛であるのに対し、アガペーの対象は必ずしも価値あるものではなく、価値なき無にひとしいものでさえある。それは利害の反する敵にさえ及ぼされる愛である。「汝の敵を愛せよ」という教えの中にキリスト教的アガペーの理念が凝縮されているとすれば、それは愛する主体の否定と犠牲を必要とする。死をもって報いられても、最後の苦しい息を絞って加害者の夫を救おうとするデスデモーナの愛はアガペーでなくて一体何であろうか (梅田 1985)。

作品を通して、彼女の言動から聖書の言葉やイエス・キリストが度々イメージされる。次にそのいくつかの例を挙げ、聖書とデスデモーナの関連を考察する。

2.2. 悪に祝福を

オセローに対するデスデモーナの信仰的愛が、最も本物であると確信できる場面は、5幕2場である。台本ではデスデモーナが死ぬのは、下記の台詞を言った後になっているが、演劇を見る場合、観客は台本を見ながら舞台を見ているわけではない。従って、オセローがデスデモーナの首を絞め、彼女が動かなくなったとき、彼女の死を認識する。しかし、その死んだはずの彼女が再び言葉を発したとき、彼女が生き返ったと感じてしまう。観客によって、彼女がそのとき、実はまだ死んでいなかったのか、それとも生き返ったのか、受け止め方は様々であろうが、筆者は、その時のデスデモーナは既に息を引き取っていたが、夫をかばいたいという強い気持ちが神に通じ、彼女に一瞬の奇跡をもたらせ、最後の言葉を発したのだと考える。“Nobody. I myself. Farewell. Commend me to my kind lord— O, farewell” She dies (V.ii.124-125).

デスデモーナを殺したのは、誰でもなく彼女自身であると彼女は断言しているが、それは全くの嘘である。彼女は無実の罪によって夫からひどい扱いを受け、その挙句に殺害されたにもかかわらず、その事実をかたくなに否定し、残忍無比の夫を“my kind lord”と呼び、その上“farewell”と言い残し、命を絶つ。このような残忍な仕打ちを受けても夫に対する態度を全く変えなかったデスデモーナの精神は「悪をもって悪に報いず、悪口をもって悪口に報いず、かえって祝福を報いなさい」(「ペテロの第一の手紙」第3章9節) という聖書の教えに一致している。

信仰的愛を最後まで貫いた彼女の愛は普通では考えられないほど永久に不変である。5幕2場で、彼女が一瞬生き返る場面は、最後まで神を信じて疑わなかったイエス・キリストの

resurrection（復活）をもイメージさせる。

2.3. 裁くなそうすれば裁かれまい

オセローは、我が妻と我が部下に裏切られたと思ひ込み、その情けない自分をどうにも認めることが出来ない「八つ裂きにしても足りぬ——よくもこのおれを間抜け男に仕立てな！」(IV.i.197)、「おれの部下と！」(IV.i.199)。そして、自分の怒りを抑え切ることができず、デスデモーナを殺害しようと心に決めるが、彼女は罪を犯したがために裁かれなければならないのだ、と彼女を殺す理由を仕立て上げ自分を正当化し、自らに言い聞かせる。「罪に決まっている、それは罪なのだ。おれの口に、あらわにそれを言わせるな、清らかな星ども！それは罪なのだ」(V.ii.1-3)、「しかもかほど罪ふかい女は、世に二人とはいははしないぞ。これでもなかつにいられるか、だが、おれのは厳しい裁きの涙なのだ、この悲しみは聖なる悲しみ、それは鞭となって愛する者の上に降りそごう」(V.ii.20-22)、“An honourable murderer, if you will, For nought I did in hate, but all in honour” (V.ii.291-292)。そして、オセローはろうそくの炎を手に自らを司祭に見たて、罪を犯した者に罰を与えると称してデスデモーナを殺害する。

対照的に、デスデモーナは最後まで神に祈り、誰の事も裁こうとしなかった。デスデモーナが不義を犯したとオセローに思ひ込まれているのは、どこかの悪者が企んだ罠ではないかとエミリアが憤慨しているときでさえ、デスデモーナは「たとえいたとしても、神のお許しがありますよう！」(IV.ii.137)と祈り、まさに夫に殺されようとしている最中にも2人のために祈る、という普通ではとうてい想像もつかないことをする「ああ、神様、お慈悲です！」(V.ii.56)、「お願い、あなたのお慈悲も！」(V.ii.58)。デスデモーナの精神には「人をさばくな。そうすれば、自分もさばかれることがないであろう。また人を罪に定めるな。そうすれば、自分も罪に定められることがないであろう。ゆるしてやれ。そうすれば、自分もゆるされるであろう」(「ルカによる福音書」第6章3節)という、イエスが人々に聞かせた言葉を忠実に守っている。

要するにデスデモーナは、Bradley (1952) が述べるように受身で無抵抗である。彼女は抵抗することも怒ることも知らない。愛情の無限の忍耐と寛容とによってのみ彼女は他からの迫害に抗することができるのである。それは外面的には弱々しく見えるかもしれないが、信仰を持つ人間でもそう簡単に成し遂げられる業ではない。

人を裁いたオセローも裁かなかったデスデモーナも結局は死んでしまった。しかしオセローは妻デスデモーナを裁き、そして自らをも裁かなければならない運命となってしまった。一方、デスデモーナはキリストが十字架にかけられたように、この世では間違った裁きを受

けてしまったが、最後まで誰も裁かなかったことにより、せめて安らかに天に昇ったのではないだろうか。キリスト教信仰を持つ者にとっては「魂が救われる」ということは理解できる発想であるが、その信仰を持たない者にとっては少々理解し難い考え方もかもしれない。

3. 最後に

イアーゴーは知性と悪が総括してできた人間であるといえよう。今西（2000）はイアーゴーというのはスペイン語ではありふれた名前でもあり、当時のイギリスの敵国、スペインの守護聖人の名前でもあった。そして、呪わしい敵国の守護聖人の名を、この悪党の名前にしたのは適切な選択であり、「自己主張，利己主義を誇る男」が、イアーゴーとなっているのは面白い。だが、当時の一般的なイギリスの観客は、「自己」を表すラテン語の「エゴー」と「イアーゴー」との間に奇妙な類縁を感じ取ったのであるまいか。自我の妄執に憑かれた男に「イアーゴー」はうってつけと言えよう、と述べている。

そして、そのイメージとしてシェイクスピアが、楽園のへびを選択したのは的確であった「主なる神が作られた野の生き物のうちで、へびが最も狡猾であった」（「創世記」第3章1節）。梅田（1985）は、イアーゴーの打算的・利己的・偽善的知性は自己の否定と犠牲をかえりみない愛が、「信仰的な愛」に敗れたと述べている。確かに考え方によれば、そう理解もできるが、筆者はこの2つの関係を、人間の永遠のテーマである、楽園のへびとエバ（女）であると考え。デスデモーナは無実の罪によって殺害されてしまった。それは創世記から続く神からの恨みとしても捉えられる。へびがエバを騙した後、神はへびにこう言った「わたしは恨みをおく、おまえのすえと女のすえの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」（「創世記」第3章15節）。イアーゴーは捕えられ、きっと楽園のへびの末のように頭をくだかれたにちがいない。そして、彼は永遠にデスデモーナの愛に勝つことはない。しかし同様に、死んでしまったデスデモーナも決して戻っては来ない。イアーゴーというへびに砕かれてしまったのだ。これでは相打ちであると解釈することもできる。しかし、こう感じてしまいがちなのは、魂の救いを信じない者だけであることを指摘しておきたい。信じる者にとっては、この続きがあるのだ。デスデモーナは天国で祝福され迎えられる。そして、信仰を持つ者にとっては、これが大きな意味をなす。また、それが善なる者の辿り着く場所なのである。

オセローは、彼女の死後、彼女いかに尊い者であったかを、懺悔ともとれるような独白のなかで、“pearl”という語で表している“Like the base Indian, threw a pearl away…”（V.ii.345）。この台詞の中の“Indian”を、“Indian”と取るか“Judean”と取るかにより、2通りの解釈ができる。前者の解釈であれば、真珠をただの貝殻ぐらいに思っているインド人

が、真珠を容易に捨てるイメージであり、後者が金のために、尊いキリストを裏切ったユダのイメージである。Johnson(1908) や Malone(1973) は、後者を支持し、次のように述べている。

For Judean. Judas Iscariot is so called because he was the Judaeen disciple, unlike the others, who were Galileans. The kiss of Judas as a token of treachery was a commonplace (Matthew 26.49), hence 356; betraying Jesus, Judas threw away a 'precious pearl' (Matthew 13.46; in the Genevan Bible, 'a pearl of great price' : see Noble, 92,273). Judas, like Othello committed suicide.

この場面でもまた、デスデモーナとキリストのイメージが重ねられ、さらに、愚か者のオセローと裏切り者のユダのイメージが重ね合わせられ、キリスト教的なイメージが鮮明に浮かび上がっている。

悪魔が人間に囁く方法は、何世紀も、今に至るまで変化しておらず、人間は悪魔が「疑念」「歪曲」, 「否定」を利用し、騙すことをよく知っている。にもかかわらず、人間はすぐその餌食になってしまう。それは創世記の時代から現在に至るまで、人間の中に同じ種類の邪悪な欲望が普遍的に存在することを示している。エバやオセローが弱かったその瞬間の人間の姿の中に、私たちは自分自身の姿を見ることができる。そして悲しい愚かさに共鳴する。さらに、イアーゴーとデスデモーナという非常に対照的な2人の人物に様々な感情を抱く。イアーゴーに宿る人間の悪に怒り、高潔・純情無垢のまま無残にも打ち砕かれるデスデモーナに人間世界の矛盾を感じ、その反面、彼女の純情な愛、情熱、信仰の強さに自らを見つめ直し、彼女の信念に尊敬の意を払うのだ。

作品を通して、シェイクスピアが観客に伝えようとしたことの1つは、イアーゴーの台詞そのものである。「人間、誰しも見かけどおりのものであるべきはず、そうでない奴がいるとしたら、それなら、そいつはそうでないように見えてもらいたいものです！」(Ⅲ.iii. 129-130)しかし、現実世界においては、今も昔も実際にはそううまくは行かず、人間社会においての変わらぬ問題、善と悪との対決である。それを楽園のへび＝イアーゴーとアガペー＝デスデモーナに見立て、その間に生きる人間の愚かさを嘆くと共に、その中で私達はどう生きるべきなのか、ということを問いかけているように思われる。

注

- 1) 存在理由
- 2) Terence Hawkes, "Iago's Use of Reason" (Studies in Philology 58, 1961, pp. 160-69). イアーゴは「善」に対する「悪」を表し、彼の「悪」の感化は「科学的推論」という手段をもってする。オセローがイアーゴに証拠を求めるとき、彼もまたイアーゴ的方法論に感化されていたのである。藤田實氏の「精神史の中のおセロウ」もまた、イアーゴに洗脳され教育されていくオセローの方向は現代的知の方向であり、オセローはやがて「真」を去って理性の側に身をゆだね、みずから貞節な妻を疑うという大過を犯した悲劇と読む（「引用文献」参照）。
- 3) ロンドンのポートレート・ギャラリー所蔵の《エドワード》6世（1546年頃。ホルバインの弟子であるウィリアム・スコットの作）という肖像画は全体がアルモルフォーズである。この絵は、正面から眺めると醜い少年の横顔がおぼろげに見えるだけだが、額縁の右側に用意された覗き穴から斜めに見ると、その時はじめてエドワード6世のあどけない顔が像を結ぶのである。
- 4) 『オセロー』の種本と言われる Giraldi Cinthio の Hecatommithi (1565) では、Ensign と the Moor（『オセロー』ではイアーゴとオセローにあたる）が Diesdemonia（オセローでデズデモーナにあたる）を毒殺するべきか、短剣によって殺害するべきか議論するが、垂木が落ちてきて頭を打ったように頭を砕き、事故死に見せかける。
 - ・ テキストからの引用は、Honigmann E.A. (ed) (1999) *Othello*, Thomas Nelson & Sons Ltd. "Othello" (1999) edited by E.A.J. Honigmann, Thompson & Sons Ltd. による。訳文をあげた箇所については、福田 恆存訳『オセロー』（シェイクスピア I 新潮社、1968）による。
 - ・ 日本語の聖書の引用は、日本聖書協会（1988）による。英語の引用は 'Bishop's Bible' (1568,etc) による。

参考文献

- Auden, W.H. (1957) "The Dyer's Hand: Poetry and the Poetic Process." *The Anchor Review*, No.2, pp. 255-301. Reprinted in J. Wain (ed.), *op.cit.*, "The Joker in the Pack," pp. 2002-2. Also R. Berry, *op.cit.*, pp. 70f.
- Bethell, S.L. (1952) "The Diabolic Images in Othello." SS5, pp. 71. Cambridge. Bradley, A.C. (Macmillan 1904 rpt. 1952) *Shakespearean Tragedy*, pp. 203.
- Hawkes, Terence (1961) "Iago's Use of Reason." *Studies in Philology*, 58, pp. 160-69.
- Honigmann, E.A. (ed.) (1999) *Othello*, Thomas Nelson & Sons Ltd.
- Johnson, Samuel (1908) *Johnson on Shakespeare*, Releigh Walter (ed.).
- Marlowe, Christopher (1973) *The Copplete Works of Christopher Marlowe*, BowersFredson (ed.) 2 vols. Cambridge.
- Richimond, Boble (1935) *Shakespeare's Biblical Knowelede and Use of the Book of Common Prayer*, Society for Promoting Christian Knowledge, London.
- Wiley, Basil (1934rpt. 1950) *The Seventeenth Century Background*. Chatto & Windus, pp. 12-14, Terence Hawkes, *op. cit.*, pp.6-12.

- 石川 実 (1988) 「オセロウ —— 破滅の美 —— 」『慶応義塾大学 日吉紀要 英語英米文学』
No. 10, pp.1-24. 日吉紀要刊行実行委員会.
- 稲垣 良典 (1979) 『トマス・アクィナス』 勁草書房.
- 今西 正章 (2000) 「イアーゴと近代—理性という狂気—」『シェイクスピアを学ぶ人のために』 世界思想社.
- 梅田 倍男 (1977) 「『オセロウ』 試論」(1) — 信仰と理性 — 『愛知教育大学研究報告』 第34巻 pp. 35-51.
- 大塚 野百合 (1966) 「『オセロウ』 における「不安」の意義」『文化対キリスト教の問題』 基督教共助会.
- 郡司 利男 (1977) 「『オセロ』 のことば」『英語青年』 第123巻第1号 4月 pp. 6-8. 研究社出版.
- ストラウス・L・リチャード (1992) 『聖書に見る夫と妻の人間関係』 (訳) 唄野 隆・いのちのことば社.
- 藤田 實 (1993) 「精神史の中のオセロウ」, 佐藤 泰正編 『「シェイクスピア」を読む——論集33』 笠間書院.
- 真下 泰利 (1977) 「オセロウの悲劇」『群馬大学教育学部紀要』 第27巻 pp. 147-162. 人文・社会学科編.